巻頭特集 表現の楽しさを体現する久喜市立太東中学校演劇部

中学生演劇の輝き

2014年から3年連続で関東中学校演劇コンクールに出場する久喜市立太東中学校演劇部。厳しくも楽しい練習で表現力や体力を磨く部員たちと生徒のために脚本を書き続ける顧問の情熱を聞いた。

生徒の個性を見て生まれるオリジナルの演劇脚本

学校内のオープンスペースに、発声練習の凛とした声音が響く。太東中学校演劇部は2014年からの3年間、関東中学校演劇コンクールに連続出場している埼玉県内の強豪校だ。

指導する斉藤俊雄先生は太東中学校に赴任して5年目。以前は久喜中学校で教えていたが、「実は久喜中学校の前は太東中学校にいました。縁の深い学校なんですね」と笑いながら話す。

我がまち久喜市が、日本の中学生演劇シーンの中心地ともいえることを知っている読者は多くないだろう。関東大会は今、日本の最先端の中学生演劇が展開されている場として評判が高い。

「とはいえ、昨年の埼玉県大会は出場校が6校。東京や神奈川は100校を超えます」と斉藤先生は謙遜するが、選び抜かれた東京や神奈川の中学校を上回り、関東大会から全国大会に選出される実力を久喜市の中学校は持っている。かつて久喜中学校演劇部の発表には遠く長崎から見に来た人がいたというから驚きだ。

斉藤先生が太東中学校に初めて赴任した際、「演劇には発表の場が必要」と、久喜市民芸術祭や子ども芸術祭に積極的に参加した。中学生ながら2時間を超える作品を演じきる同校演劇部は評判となり、大ホールが満員で立ち見が出ることもあった。

やがて久喜中学校に異動となった斉藤先生は両校演劇部の交流会を企画。これが後に久喜市の中学校演劇発表会となり、やがて関東大会出場を決める埼玉県大会へと変遷していく。

斉藤先生は33年の教員生活で32年の演劇部指導歴を持つ。自身に演劇の経験はなく最初は手探りで指導を始めたが、顧問となって2年目に「部員全員を舞台に立たせてあげたい」という思いから脚本の執筆に挑戦。以来、手掛けた脚本は約30本、舞台に上げなかった生徒はひとりもいない。

▲出版されている斉藤先生の作品集は、多くの中学生演劇関係者が愛用している。6月には3冊目の作品集「ふるさと」も出版された

顧問・斉藤俊雄先生

大学時代は学生マジシャンとして舞台に立ったこともあるが演劇は未経験だった。オリジナル脚本はコンクールやテレビ局後援の脚本賞などで数多くの受賞を果たしている

フリモARで動画をチェック!

▼「小学校の時に太東中演劇部の上演を見て入部した」という生徒も。ちなみに、大会の配役は部内オーディションで決めるので、演劇部の仲間は良きライバルでもある

太東中演劇部の練習風景

▲自然観察は生徒の感性を豊かにする同校演劇部の大切な練習。5月には日光でのハイキングも行う

▲縄跳びは基礎体力強化の練習。二重跳びを連続で300回跳ぶ生徒もいるというから驚きだ

▲ジャスダンスのコンテストで埼玉県教育長賞を受賞するほど、同部のダンスはレベルが高い。自分の立ち姿をイメージできるようになるほか、姿勢が良くなるメリットもある

「脚本は生徒を思い浮かべながら書きます。セリフを何度も間違えるのは、私の脚本に問題があるから。だから何度も書き直します。脚本作りは生徒との共同作業なんです」と斉藤先生。部長の清水朝加さんも「先生が私たち一人ひとりの個性を生かした脚本を書いてくださることがとても嬉しいです」と信頼を寄せる。

多彩でユニークな練習が生徒の表現力を磨く

太東中学校演劇部の練習は、発声練習の後に縄跳びやダンス、殺陣、合唱など多彩なメニューで汗を流す。斉藤先生はこれを積み木に例える。

「最初は、生徒が真っ白い積み木を数個しか持っていないとします。これだと作れる形は多くありません。でも生徒が努力を重ねてダンスや縄跳び、歌の積み木を増やすことで、自ら形作れるものはグンと複雑に、そして色鮮やかになるんです」。

演劇は総合芸術だ。表現力はもちろん体力も求められるが、生徒はそれを実現するための「積み木」を練習によって増やしていく。ある程度ハードルが高く多彩な練習メニューは、日々のマンネリ化を防ぎ、生徒に目標を達成する喜びも与える。

現在、太東中学校演劇部は13人。部長の清水さんが「上級生が教えたことで後輩が成長する瞬間がとても嬉しいです」と話せば、2年生の山崎叶乃さんは「全員でひとつの素晴らしい作品をつくる意識が高いことが魅力です」と返す。積み木は自己鍛錬や切磋琢磨、仲間の支えでも数を増やすのだ。

かつては2時間を超える脚本も手がけていた斉藤先生だが、近年ではシンプルさを心掛けている。「上演したい人がいて演じる場所さえあればできる演劇。今はそれを大切にしています」。

きっかけは東日本大震災。その年、避難場所の体育館でも上演できる「ふるさと」という劇を作った。その「ふるさと」は現在も被災地の中学生によって上演され続けている。大がかりな舞台や衣装を必要としない劇作りの取り組みは、演劇の裾野を広げることにもつながっている。

「中学生が演じるからこそ笑えるし、泣ける。中学生は誰でも本当に素晴らしい可能性を持っている。そんな輝きが生まれる瞬間に立ち会えることが、中学生演劇の魅力です」と斉藤先生は目を細める。

今年の夏季埼玉県中学校演劇発表会は7月24日に菖蒲文化会館で開催される。興味のある人はぜひ観覧して欲しい。中学生の発するみずみずしい輝きに、きっと心が動くはずだ。

3年・部長
清水朝加さん

「全国大会出場はひとつの目標ですが、1番の目標は1人でも多くの方に感動していただけるような演技をすることです」

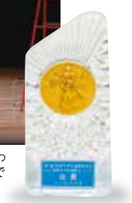
2年
山崎叶乃さん

「演劇の魅力は役を演じることで新しい自分を見つけられること。でも感情にセリフを乗せることは難しいです」

2016年夏季
埼玉県中学校演劇発表会

日程／7月24日(日)
時間／9:30〜16:30
場所／菖蒲文化会館（アミーゴ）
久喜市菖蒲町菖蒲85-1
入場料／無料

太東中演劇部は夏になると3年生が引退。翌年の年度末に行われる関東大会には1、2年生でのぞむ。2014年には関東大会で金賞を獲得して全国大会にも出場



文／生形勝喜　写真／株式会社ファイブシーズン　写真提供／太東中学校演劇部　デザイン／神尾方子